

茨木市教育研究所 第2土曜科学教室

第2土曜科学教室は、市民総合センター(クリエイトセンター)で、8月を除く毎月第2土曜日に開催されています。

市内に住む小学3年生から6年生を対象にした教室で、理科に親しんでもらおうと毎回楽しい実験や観察が行われています。



氷の分子モデル作り

第2土曜科学教室ってどんなところ?

第2土曜科学教室は、平成4年(1992年)9月から、全国の公立学校で第2土曜日が休みになったのをきっかけに始まりました。子どもたちの活動場所として開催されるようになり、暴風による警報発令があった回以外は開催され、14年以上続いています。担当しているのは、教育研究所の理科教育担当で、身近な自然現象や暮らしの中の科学的現象を、実験や観察、理科工作を通じてわかりやすく解説しています。

ある日の実験「氷のはなし」

「コップの中に氷の固まりを入れ、縁まで水を注ぎます。氷が溶けたら水はあふれますか。そのままですか。減りますか」。この先生の問いかけに、子どもたちが「ええ!!」という表情になりました。そこから今日の科学教室が始まりました。

次の実験では、氷の上に2本の指を乗せます。それからそのうちの1本の指には塩を付けて氷の上に置きます。どちらの指が冷たく感じるか、子どもたちは体感温度の違いを比べていました。そして「こっちの方が冷たい!」と大きな声で答えていました。

塩が氷点を下げる性質を知った子どもたちは、自分でアイスキャンデーを作る実験に挑戦します。子どもたちは目を輝かせて水筒に氷と塩を入れ、その中でアイスキャンデーを作っていました。

また、インターネットでいろいろな雪の結晶を見た後、「雪の結晶には、二つと同じものがないそうです。それ



アイスキャンデー作りに挑戦する子どもたち

はどうしてでしょうか」という問いが投げかけられました。不思議そうな子どもたちの表情。

用意された三角形の紙片を、一定のルールに従って並べていくと、雪の結晶のモデルになっていきます。これは氷の結晶とも共通したモデルです。(詳しくは下記ホームページアドレスをご覧ください)

担当の向井先生は、「子どもたちが科学を探究する目を持ってくれるような実験や観察、理科工作などを選んでいきます。初めて参加する子どもたちやどの学年の子どもたちも知的好奇心を発揮できるように、毎回工夫をしています」と話しておられました。

- 市民総合センター(クリエイトセンター)
南館4階 科学実験室
 - 毎月第2土曜日(8月を除く)
10:00~11:30(90分)
 - 参加費無料(道具や材料を必要とすることがあります)
 - 募集人数
市内の小学3年生~6年生 各回35人
(実験の内容により多少の変更があります)
 - 申込期間
毎月1日から開催日の前日(土・日曜日、祝日を除く)
まで 9:00~17:00
- 茨木市教育研究所
〒567-0888 茨木市駅前4-6-16
TEL 626-4400

わがまち茨木の 民話・伝説

各地に民話・伝説があるように、茨木にもいくつかの話が残されています。茨木市では、昔から語り伝えられている話や古典・古記録に残されていた茨木に関する話を集めて、『わがまち茨木 民話・伝説編』に掲載しています。今回は、その中の2編を紹介します。



お不動さんと称して祭られている石仏

おさん・茂平(石河村)

(前略) やまの道をどんどん行くと福井と石河と安威の領境がありましてなあ、そこが国見峠と言うて、昔はお茶所がありましてなあ、昔ここでおさん、茂平が心中したと伝えられていまねや、おさんはな、すごい美人でな、大阪から京都のある金持ちの商家へ嫁入りしましたんや、その家には茂平と言う下男と女中が居りましてな、茂平は丹波の生まれで男前でな、また、女中もなかなかの美人で、二人は末は夫婦の約束をする程仲が良かったそうでっせ。ところがおさんの主人もなかなかの女好きで、(中略 おさんは主人が女中部屋に通っていることを知り、それを確かめようと、また茂平も二人の仲を確かめようと部屋へ入る。そこへおさんの主人が女中に会おうと部屋に入ってきた) 部屋の中には自分のおさんと下男の茂平、えらいこっちゃ、こら不義者めと部屋を飛び出し、代官所へと訴えましたんや、さあ困ったことや、姦通罪は市中引廻し打首の罰がある。この事を知った茂平とおさん二人は、死地を求めて江洲へ行きましたが、死ぬ事が出来ず、茂平の故里丹波へ帰りましたんやが、ここでも追手が厳しく(後略) (『わがまち茨木 民話・伝説編』より)

この地は昔、能勢妙見参詣でにぎわった街道(妙見街道)だった。この街道近くの山手台中央公園付近に、「おさん茂平」の案内板がある。案内板には、京都の商家に嫁いだおさんと丹波から来た茂平が姦通の罪に問われ、これを逃れるためにこの地まで来たが、ついに心中をしたという伝説の地であることが記されている。

実際に起きたこの事件を、井原西鶴が『好色五人女』で、近松門左衛門が『大経師昔暦』で、それぞれ取り上げている。

案内板の近くにある碑や道標



お不動さん(太田村)

(前略) ある男がお不動さんを荷車に積んで街道を西から東へ過ぎて行こうとしました。急な坂に出合いましたので、「やれやれ、ここで一休みしよう」と、車を止めて上の広場で休みました。(中略)「さあ、もう一仕事しよう」として男は車を引こうとしましたが、どうしたのか、車が動きません。「お不動さんはここが住みよいところときめられたのでしょうか」と考えました。そこで街道から階段を上ったところの傍にくずやの祠を建て、お不動さんをお祀りしたということです。その後、この祠は焼けてしまいましたので、現在地にお堂を造ってお不動さんをうつしました。太田の人達はお不動さんを『太田のお守り』として今でも祀り続けています。焼けた所には昭和の中頃まで大きい石が置かれていましたが、今はそこには見当たりません。(『わがまち茨木 民話・伝説編』より)

お不動さんと称して祭られている石仏は、花崗岩でできていて、高さ170cm、幅60cm、厚さ50cmの板状の自然岩の表面いっばいに如来形の立像を線刻している。火を受けたのか表面がかなり荒れている。

60年に1度の開帳となっているので、実物を拝んだ人は少ないようだ。(『わがまち茨木 石造物編』『わがまち茨木 民話・伝説編』より)



「お不動さん」のお堂

